
派手な男～俺の人生で1人だけ～

姫林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

派手な男～俺の人生で1人だけ～

【NZコード】

N6884C

【作者名】

姫林檎

【あらすじ】

俺の人生の中できっとたつた1人だけ。金持ちで派手好きで『俺様』な感じで美形で頭もいい。そんな男『跡部』はとっても人間らしい。

(前書き)

漫画を読みながらふと思いついた短編小説です。
楽しんでくださいと嬉しいです。
決して恋愛物ではないので。

やっぱり人間っていうのは1人1人の運命の物語があるわけ。

俺の場合、物語の中にど派手な男が1人いた。

試験中の学生の強い味方はやっぱりコンビニ。

俺だけかもしれないけど、とにかく俺は試験中何度もコンビニに行くんだ。

コンビニを出ると、向こうから派手な男が来た。

ふと顔をあげてそちらを見ると、男が一ニヤリと笑った。

だけど寝不足の俺の目には誰だかわからなかつた。

「よお ジロー」

「・・・あとべ」

俺は大きなあくびを一度して、足を止めた。

きゅうきゅうと周りを見ると車とかはなかつた。

「歩きたの?」

「ああ。散歩だ。」

「そつかあ、試験中つて体おかしくなりそうだよね。勉強ばつかだ
し。」

「お前は部活中も寝てるだろ？が

相変わらず人を見下すような態度だつた。

この派手な男は跡部。

俺の入つているテニス部の部長で、超がつく金持ち。

かなりの美形で、頭もかなりいいもんだから女生徒にモテモテだ。

一方俺は超がつく一般人で、一応レギュラーだけど補欠が多い。

顔も美形じゃないし、女生徒にもモテない。

跡部みたいにきやあきやあと様付けで呼ばれたりもしないし、それ
どころか『ジローちゃん』とか呼ばれてる。

この美貌とかを少しでもわけてほしいもんだ。

俺がほんやりと考えていると跡部がふん、と笑う。

「なんだ？ほーっとして。眠いのか？」

「うん。あんまり寝てないんだ」

「どうせ知らない間に寝てんだろう？」

くくく、と跡部が笑う。

怒る気にもなれず、俺はため息をついた。

「しょうがねえな 僕様が特別にお前を家に招いてやるのよ
「え？」

「ホラ ついてこ」

そう言つて跡部は俺の返事も何も待たずにすたすたと歩き出した。

慌てて小走りでついていく。

「ううう強引なところもあつたんだった。

これが唯一の欠点かもしねない。

跡部の家に行つたのは初めてじゃなかつたけど、相変わらず凄かつた。

「今日は誰もいないんだ。泊まつてもいいだ」

「勉強教えてくれるんならいいよ」

「ヤリと笑つて言つと、跡部も一ヤリと笑つた。

強制御招待したんだからそれぐらいしてくれたっていいじゃん?

「俺様はスバルタだぜ? ついてこいよ」

「うん」

俺は大きく頷いて跡部と勉強机へ向かった。

「・・・だから・・・」

跡部の声が子守唄のように聞こえる。

そうだった コイツ、声も綺麗なんだよ・・・

まつげ長い・・・肌綺麗・・・

ぽんやりと考へてると、どんどん意識が遠のいていく。

ガクンシとなりそなとこりで跡部が俺のどこを指でぼじいた。

「コラッ寝るんじゃねえ!」

「う・・・」

俺は慌てて顔をあげた。

「つたぐ・・・せつかく俺様が教えてやつてるつてのになんて奴!」

「だつて跡部……」の問題難しこよお

「……お前、今まで何を勉強してたんだ？」の問題、今回の試験範囲の基本だらうが

「……え？」

俺は慌てて跡部の持つてた教科書を見た。

「えー！？違つよお！だつて今回の範囲はこりでしょ？」

俺は跡部の開いたページからかなり戻つたといひを指差した。

跡部の眉がピクッと動く。

「ジロー」

「ん？」

「それは前回の試験範囲だ。」

「……え？」

俺がきよとととしてると、跡部は大きくため息をついた。

「跡部……俺……どうすれば……」

「『今回の』試験範囲から急いで勉強するしかないだらうへ。」

「そんなの今からじや無理だ！」

だつて試験は明後日から。

そんなの無理に決まつてゐる。

どうして今まで気がかなかつたんだろう！？

「つたく、普段の授業で寝てるからいつなんだよばあか

「うう・・・だつて眠いんだよお・・・」

「・・・仕方ねえな。ホラ、勉強すんぞ」

跡部はぺしん、ヒプリントで俺の頭をたたくとニヤリと笑つた。

それから俺は試験最終日まで毎日跡部の家に泊まり、勉強を教わつた。

跡部はといふと、『俺様は天才だから試験勉強なんて必要ねえ』なんて言つてた。

でもさ、跡部　俺知つてるよ？

俺が寝た後こそそこ勉強してるんだよね？

やっぱ、跡部も人間なんだよね。

最終日、お礼の一つもさうと跡部を探していくと後ろから髪の毛をひつぱられた。

「うわー？」

「どうだ？ 手こたえは。」

「ヤリと笑つたやつこつたのは跡部だった。」

「跡部のおかげでばっちり！」

「ほお それは結果が楽しみだな。」

「跡部じゃ、寝不足なんじやないの？ 田の下少し黒いよ。」

「俺様はぐつすり寝たさ。お前が寝てすぐにな。」

「・・・嘘」

「アーン？なんか言つたか？」

「なんでもある？」

俺はくすくすと笑つた。

跡部は首を傾げていた。

「ジロー！ 跡部！ 久しづりの部活行くぞ！」

向ひから友達が呼ぶ。

「跡部もジローもどうだったん? ジローはずつと跡部ン家に泊まってたんやろ?」

「うんつおかげで跡部が人間なんだなーってわかつた!」

「アーン? 人間に決まつてんだろ?」

俺の物語を鮮やかにしてくれる友達がいる。

その中に1人ど派手な男がいる。

金持ちで、天才で、美形で。

だけど凄く優しい男。

俺はこの男が大好きだ。

(後書き)

ファンの方で『なんだこれ?』とか思った人はすみません。
またいつか忍足バージョンとかでかけてみたいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6884c/>

派手な男～俺の人生で1人だけ～

2010年10月8日22時00分発行